

「シンガポール国立大学分析アジア哲学プログラム参加報告書」

京都大学文学研究科博士後期課程 1 年 岡村太郎

①学習成果、③プログラム内容

本派遣において提供されたプログラムは、(1) The Kyoto-National Chenchi-NUS Triangular Graduate Student Conference という国際会議への参加と、(2) 心の哲学セミナーへの出席の二つであった。

(1) 国際会議においては、主として京都大学、国立政治大学、シンガポール国立大学の大学院生の発表が三日間にわたって行われた。それらの研究発表のそれぞれは、アジア思想に対して様々な角度からアプローチするものであり、大変勉強になり、刺激を受けた。特に、仏教に関心があるものの日頃専門としていない私にとっては、仏教思想に批判的検討を加え、明快な理解を試みる研究発表を聴くことは大変勉強になった。また英語による議論も活発に行われ、日頃英語で議論をすることが少ない私にとって大変貴重な機会となった。また私自身は、'On the notion of self: Hume and Asian thoughts' というタイトルで、東京大学の渡辺一弘氏と共同で発表を行った。これまで多くの研究者がヒュームの自我論と仏教のそれを比較して類似点を指摘したり、あるいは相違点を指摘したりしてきた。そうした状況を踏まえわれわれの発表は、多くの場合その比較はヒュームの自我論の一側面のみに着目したものであり、両者の十分な比較とはなっていないことを指摘するものである。こうした発表について、聴衆に様々な角度から質問・コメントをいただいた。ヒューム、仏教のそれぞれに通じている先生方からいくつか好意的な意見をいただけたことは、われわれの研究にとって大きな励みとなった。

(2) 会議のない日は心の哲学についてのセミナーに出席した。私自身心の哲学に関心があるため、講義内容は私の興味に沿ったものであり、大変勉強になった。また、対話を重視する授業スタイルに触れたことも私にとって良い経験となった。ほとんどのセミナーにおいて出席者は発言を求められるので、自分が感じた疑問点を納得のいくまで質問することができ、授業内容についての理解は深まった。また英語で自分の意見を表現する訓練にもなった。

②海外での経験

シンガポール滞在中は台湾から派遣されている学生と共に大学の寮で生活していたため、台湾の学生、シンガポールの学生と様々な形で親交を深めることができた。また授業の合間にシンガポールの名所を訪れるなど、シンガポールの文化に触れることができた。

④進路への影響について

今回の滞在によって、外国の研究者と議論を交わし、問題関心を共有していくことの面白さ、また重要性を認識した。私は現在博士課程在学中であるが、今回の経験を踏まえて、積極的に留学をするなどして、将来的には自分の研究を海外に発信していきたいと考えるようになった。